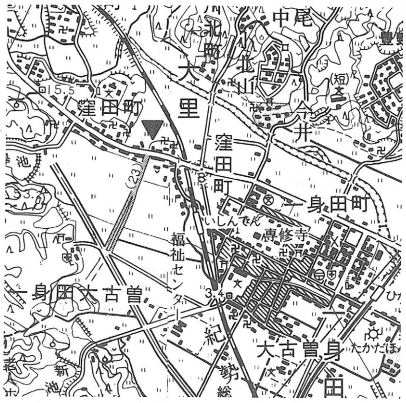
三重・六大（ろくだい）A遺跡

1　所在地　三重県津市大里窪田町
2　調査期間　一九九五年（平7）四月～一九九六年三月
3　発掘機関　三重県埋蔵文化財センター
4　調査担当者　穂積裕昌・山本義浩
5　遺跡の種類　祭祀遺跡・河道跡・集落跡
6　遺跡の年代　弥生時代後期～中世（一六世紀）
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

六大A遺跡は津市の北部、志登茂川右岸の標高四～一〇mの緩やかな丘陵斜面に立地する。遺跡から約五km下ると伊勢湾へ出られるが、地元の伝承によると、かつては河口から六大A遺跡付近まで舟で遡上することができたという。



（津西部・津東部）

志登茂川とその支流、毛無川の流域は、特に飛鳥時代以降に大規模に開発されたようで、国道二三号線中勢道路建設に伴って調査さ

れた大古曽遺跡・橋垣内遺跡・六大B遺跡・六大A遺跡や、県道建設に伴って調査された大垣内遺跡などで、多数の律令期の掘立柱建物が確認されている。特に六大A遺跡に南隣する六大B遺跡では、正方位を意識した大規模な掘立柱建物群が確認されるとともに、溝から八世紀後半の土器に伴って「□□十□年十月七日□前東人」と書かれた木簡が出土しており注目される（本誌第一五号）。これら遺跡群は、窪田遺跡群とでも総称しうるもので、旧伊勢国奄芸郡の中心地の一角と言うことができる。六大A遺跡は、これら遺跡群の北端に位置して水陸交通の要衝であったと言えよう。

今回紹介する二点の木簡は、調査区の中央部を縦断する大溝から出土したものである。大溝は、上流部で幅一五m深さ一m、下流部で幅三〇m深さ三m、調査区内での総延長約一〇〇mを測る大規模なもので、最下層に弥生時代後期の土器、最上層に中世の土器を包含する。大溝内部には、素掘りや石組みの井泉、貼石などが敷設されており、井泉や出土遺物の存在形態から、古墳時代を中心とした時期に祭祀が行なわれた痕跡が明瞭で、大形の土馬などの存在からこの祭祀行為は律令期にも継続していたようである。

木簡や土馬以外に注目できる律令期の遺物としては、獣脚付圏脚円面硯や円面硯、「嶋」「北」「大川」などの墨書土器、土管、緑釉陶器、隆平永宝、下駄などの木製品がある。

木簡の年代は、大溝出土資料という制約上、大雑把なことしか言えないが、I層からⅣ層に大きく分けられる堆積土中、(1)はⅡ層出土で飛鳥～平安時代、(2)は最上層のI層出土で中世ということになろう。

8　木簡の釈文・内容

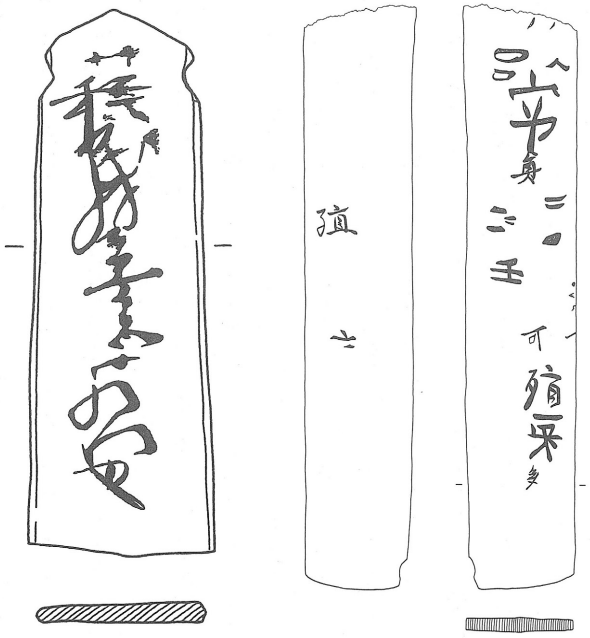
(1)　・『□』真『□□』可『□』『殖□』多」　(280)×(50)×5　061

・　殖　□　」

(2)　「〈蘓民将来子孫門也」　87×30×3　032

(1)は曲物の底板を転用した材で、上端部及び側面を欠損する。文字は表裏に存在し、仮に文字数の多い方を表面とした場合、表面の文字の配列は、規則性に乏しく、また記号かとも思われる意味不明の墨痕も存在する。表面の「真」「可」「多」以外は線が太く、三字とは異筆であろう。その場合、字体の異なる「殖」が表裏に存在していることになる。記号状墨痕の存在から何らかの呪符とも思われるが、判読できない文字も多く、確定できない。

(2)はいわゆる蘇民将来札である。形状的にはほぼ原形を留めている。ただし墨痕は薄く、「将来子孫」の部分は極めて判読しづらい。なお、本例とは別に、本例と頭部の形状が共通するものの、墨書がない木簡状木製品が一点、Ⅱ層から出土している。（穂積裕昌）



(2)　　(1)